

語声調方言：佐柳島と真鍋島のアクセント

早田，輝洋

<https://doi.org/10.15017/2332701>

出版情報：文學研究. 75, pp.29-38, 1978-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

語 声 調 方 言

—佐柳島と真鍋島のアクセント—

早 田 輝 洋

0. 瀬戸内海の佐柳島^{さなぎしま}とその隣島、真鍋島^{まなべしま}のアクセントについては幾つかの音韻論的解釈(秋永 1966, 金田一・秋永・金井 1966, 服部 1973, 上野 1977)が提出されているようであるが、その中でも筆者の知る限り、上野氏のものが最新で、かつ最もまとまったものと考えられる。しかも氏が両アクセント体系を「4型アクセント」と推定していることに対しては全く賛成せざるをえない¹⁾。ただ、上野氏は両方言を「4型アクセント」即ち筆者のいう「語声調言語」(早田: 331以下)の一つとしながらも、アクセント(核)の位置を有意味とみていることは、分析のレベルが音素論(アクセント素論)のレベルであるとはいえ、問題であると思われるので、筆者の観点からの解釈を述べたいと思う。

服部(1973)では、アクセント素論レベルの表示のほかにも形態アクセント素論レベルの表示も併記されているが、そこでもやはり佐柳方言についてアクセント核(7)の位置が弁別的になっている²⁾。しかし服部氏は、この方言の3モーラ名詞に5番目のアクセント型が「存在しそうである。他日の調査・研究を待ちたい。」とされ、この方言を4型アクセントとは考えていないのであるから、アクセント核の位置を弁別的とするのも当然である。上野氏は明らかに4型アクセントと推測していながらアクセント(核)の位置を有意味とするのであるから、

1) 筆者はかつて(早田 1977.: 331)佐柳島のアクセント体系を、服部氏に倣い音節数の増すに従ってアクセント型の数の殖える方言、即ちアクセントの位置の有意味な「アクセント言語」かと考えたが、それは誤りと思われる。

2) 形態アクセント素論レベルの表示は、筆者の音韻表示(基底表示)のレベルと同様の抽象的レベルと考えて一応さしつかえない。

服部氏と似ているようでありながら、また大きく違う可能性がある。上野氏は形態アクセント素レベルの表示を一切示していないので、筆者の立場と完全に違うのかどうか不明ではあるが、氏は「東京【方言のアクセント】は、……本質的には、以下の、例えば佐柳島さなぎしまのアクセント、……などと異なることに注意していただきたい。」(上野：286)としているので、本質的に筆者の見解と違うのであろう。

1. 両方言のピッチ形は種々の形をとり動揺が激しく、一定していないという。佐柳島アクセントのピッチ形は、上野氏が、金田一・秋永・金井(1966)、服部(1973)をもとに大変綺麗にまとめてあるので、今ほぼそれに倣って簡略に示せば表1のようになる(上野, p.307)。ここで「。」を付したものは言い切りの形, 「……」を付したものは後に続く形である。

表1 佐柳島アクセントのピッチ形(上野氏による)

蚊	カニ。	{ $\overline{\text{カーガ}}$ 。 { カガ 。}}	{ $\overline{\text{カーガ}}$ … { カガ …}}	{ $\overline{\text{カニ}}$ 。 { カニ 。}}	{ $\overline{\text{カニ}}$ … { カニ …}}
名	チ一。	{ $\overline{\text{チーガ}}$ 。 { チガ 。}}	{ $\overline{\text{チーガ}}$ … { チガ …}}	{ $\overline{\text{チニ}}$ 。 { チニ 。}}	{ $\overline{\text{チニ}}$ … { チニ …}}
山	{ $\overline{\text{ヤマ}}$ 。 { ヤマ 。}}	{ $\overline{\text{ヤマガ}}$ 。 { ヤマガ 。}}	{ $\overline{\text{ヤマガ}}$ … { ヤマガ …}}	ヤマニ。	ヤマニ…
犬	{ $\overline{\text{イヌ}}$ 。 { イヌ 。}}	{ $\overline{\text{イヌガ}}$ 。 { イヌガ 。}}	{ $\overline{\text{イヌガ}}$ … { イヌガ …}}	{ $\overline{\text{イヌニ}}$ 。(?) { イヌニ 。}}	{ $\overline{\text{イヌニ}}$ …(?) { イヌニ …(?)}}
音	{ $\overline{\text{オト}}$ 。 { オト 。}}	{ $\overline{\text{オトガ}}$ 。 { オトガ 。}}	{ $\overline{\text{オトガ}}$ … { オトガ …}}	{ $\overline{\text{オトニ}}$ 。 { オトニ 。}}	{ $\overline{\text{オトニ}}$ … { オトニ …}}
石	イシ。	イシガ。	イシガ…	イシニ。	イシニ…
庭	{ $\overline{\text{ニワ}}$ 。 { ニワ 。}}	{ $\overline{\text{ニワガ}}$ 。 { ニワガ 。}}	{ $\overline{\text{ニワガ}}$ … { ニワガ …}}	{ $\overline{\text{ニワニ}}$ 。 { ニワニ 。}}	{ $\overline{\text{ニワニ}}$ … { ニワニ …}}
肩	{ $\overline{\text{カタ}}$ 。 { カタ 。}}	カタガ。	カタガ…	カタニ。	カタニ…(?)

姿	{スガタ。}	スガタガ。	スガタガ…	スガタニ。	スガタニ…
命	イフチ	イフチガ。	イフチガ…	イフチニ。	イフチニ…
二十歳	ハタチ。	ハタチガ。	ハタチガ…	ハタチニ。	ハタチニ…
魚	{サカナ。}	{サカナガ。}	{サカナガ…}	{サカナニ。}	{サカナニ…}
	{サカナ。}	{サカナガ。}	{サカナガ…}	{サカナニ。}	{サカナニ…}
鱈	イワシ。	イワシガ。	イワシガ…	イワシニ。	イワシニ…
兎	ウサギ。	ウサギガ。	ウサギガ…	ウサギニ。	ウサギニ…

(?)は秋永の原文のもの。

服部氏はこの一見渾沌たるデータをアクセント素論の立場から表2のように見事に分析し、上野氏もそれに同意している³⁾。上野氏には別に助詞アクセントに関する議論もあるが、今それを略す。服部・上野両氏の分析は音素論（アクセント素論）レベルのものであるので、同

表2 服部(1973)による佐柳アクセントの解釈

蚊	/ㄌカー/	/ㄌカー・ガ/	/ㄌカー・ニ/
名	/ナ ¹ ー/	/ナ ¹ ー・ガ/	/ナ ¹ ー・ニ/
山	{/ヤマ/}	{/ヤマ・ガ/}	{/ヤマ・ニ/}
犬	{/イヌ/}	{/イヌ・ガ/}	{/イヌ・ニ/}
音	{/オト/}	{/オト・ガ/}	{/オト・ニ/}
石	{/イシ/}	{/イシ・ガ/}	{/イシ・ニ/}
庭	{/ㄌニワ/}	/ニワ ¹ ・ガ/	/ニワ ¹ ・ニ/
肩	{/ㄌカタ/}	/ㄌカタ・ガ/	/ㄌカタ・ニ/
姿	{/スガタ/}	{/スガタ・ガ/}	{/スガタ・ニ/}
命	{/イノチ/}	{/イノチ・ガ/}	{/イノチ・ニ/}
二十歳	/ハ ¹ タチ/	/ハ ¹ タチ・ガ/	/ハ ¹ タチ・ニ/
魚	{/サカナ/}	{/サカナ・ガ/}	{/サカナ・ニ/}
鱈	{/イワシ/}	{/イワシ・ガ/}	{/イワシ・ニ/}
兎	/ㄌウサギ/	/ㄌウサギ・ガ/	/ㄌウサギ・ニ/

3) 表2は上野氏の整理作成したもの(上野, p.308)に倣った。

一形態素のアクセントが助詞の付きかたで変る。服部氏はそれより抽象的な形態アクセント素表示をも併せ示している(表2の // // 内の形)。

筆者の音韻表示のレベルは、むしろ氏の形態音素表示のレベルに近いものである。従って表2の例の「庭」と「肩」は、この方言の話し手にとって区別のある形式である以上、助詞の有無に拘らず区別される形式として扱う。そうすると表2において、1音節語に2通り、2音節語と3音節語とに4通りの型の区別が認められる。上野氏(p. 307)の言う通り「4モーラ以上の語を精査しないうちは勿論断言できないが、この方言は【語形が】長くなっても4種類のアクセント素しか存在しない4型アクセントの様相を呈しているように見える。」そのことは、音節数とアクセント型の数の関係はもとより、現実のピッチ形の様相——容易にアクセントの位置を定め難い——からも推定できる。即ち筆者の解釈によれば、この方言は、“各単語(文節)は4種の声調のうちのどの声調を持っているか”が弁別的な「語声調言語」であって、“各単語(文節)中のどの位置に来るか”が弁別力を有するアクセントは存在しない、と考えられる。即ち表2は、助詞に関係なく表3のように考えられる。ただし、「一」「\」「ノ」「L」は語声調を表わし、便宜上各語の前に記す⁴⁾。

表3 筆者の解釈による佐柳島アクセントの体系

	一	ヤマ (山)	一	スガタ (姿)	
ゝ	ナ (名)	\	オト (音)	\	ハタチ (二十歳)
ノ	カ (蚊)	ノ	ニワ (庭)	ノ	サカナ (魚)
		L	カタ (肩)	L	ウサギ (兎)

4) 語声調言語で4通りの対立を示す例としては朝鮮語晋州方言が挙げられる(Hayata 1978)。

この四つの声調がどのような弁別素性からなっているかは興味ある問題である。それは、一つの言語に幾つまで語声調が認められるか、という当然起る疑問に関係する。しかし、それはなお多くの言語・方言を分析してみしてから考えられる経験的な問題であろう。かなり記述されている音節声調言語（中国語や東南アジア諸言語のような）でも、声調数の上限ということはアプリアリには言えないはずである。

2. 真鍋島の体系も佐柳島の体系とほとんど同じである。音声形を上野 (P.310) により表4に示すが「子」と「手」の形は、上野氏の注記「コー(子)は犬と、テー(手)は糸と……同じアクセントである」によって筆者が書き加えたものである。「この」に続く形は略した。

表4 真鍋島アクセントのピッチ形

コー	(子)	コーガ	
ハー	(葉)	ハーガ	
テー	(手)	テーガ	
イヌ	(犬)	イヌガ	
オト	(音)	オトガ~オトガ	
イシ~イシ	(石)	イシガ~イシガ	
カゼ	(風)	カゼガ~カゼガ	カゼガナイ
イト	(糸)	イトガ	イトガナイ
アタマ	(頭)	アタマガ	
ハタチ~ハタチ	(二十歳)	ハタチガ	
オンナ	(女)	オンナガ	
サカナ~サカナ	(魚)	サカナガ~サカナガ	サカナオトル
スズメ	(雀)	スズメガ	スズメオトル

上野氏の解釈は表5のように佐柳島のものと同様に、Lと∩の2種のアクセントがあり、その位置が有意なアクセント体系となっている。

表5 上野氏の解釈による真鍋島アクセントの体系

(コー)	'子'	イヌ	'犬'	アタマ	'頭'
ハ	'葉'	オト	'音'	ハタチ	'二十歳'
(テ)	'手'	カゼ〜カゼ	'風'	サガ	'魚'
		イト	'糸'	スズメ	'雀'

()内は、上野氏の解釈を筆者が推定したもの。

上野氏によれば、佐柳・真鍋の両体系は「極めてよく一致する。アクセント素体系という枠自体では、佐柳の /○○[∩]○○/ 【例えば「魚が」】が真鍋で /○○○[∩]○/ になっている点だけ、所属語類では、1音節名詞の「子」の類が佐柳では「手」の類と合流している点だけが異なっている。」(p.313)と言う。上野氏は、両方言を音節でなくモーラで分析しているので、両体系は表6のように「極めてよく一致する。」所属語類を別にすれば、異なっているのは確かに∩の位置が1箇所、即ち「佐柳の /○○[∩]○○/ が真鍋で /○○○[∩]○/ になっている点だけ」になる。

表6 上野氏による佐柳・真鍋両アクセントの対応

佐柳島	真鍋島	
○○	/ 同	左 犬, 子(真鍋島)
○ [∩] ○	/ "	音, 葉
∩○	/ "	糸, 風, 手, 子(佐柳島)

○ ○ ○	/	同 左	頭
○ [┐] ○ ○	/	〃	二十歳
○ ○ [┐] ○	/	〃	魚, 風が
┐○ ○ ○	/	〃	雀
○ ○ ○ ○	/	〃	頭が
○ [┐] ○ ○ ○	/	〃	二十歳が
○ ○ [┐] ○ ○	/	○ ○ ○ [┐] ○	魚が
┐○ ○ ○ ○	/	同 左	雀が

しかし筆者の解釈によれば、○○[┐]○○ と ○○○[┐]○ の違いは問題にならない。これは音声的な違いであり、音韻的にはともに同一の語声調を持つ型 /[┐]○○○○/ と考えられ、両方言の間に違いはない。2音節以上で両方言のアクセント型は全く同じである、という解釈が得られるか否かは体系を見る上で大きな違いになる。

さらに、この方言の体系はモーラでなく音節で考察する必要がある、表7で見ると、1音節語が佐柳島では2種の型しか区別されないのに対し、真鍋島では3種の型を区別する点の違いが体系として重要である。そして両方言の体系上の違いはこの点だけなのである。所属語類の違い(「子」の類)も実は「語類の所属」といういわば語彙論上の問題ではなく、1音節語の「アクセント型の体系」の問題である。3型ある体系と2型しかない体系とでは、所属語類に違いが出るのは当然である。音節で分析すべき体系をモーラで分析すると、このように重要な体系上の違いが蔭に隠されてしまうことがあるのは注意を要する⁵⁾。

服部氏は佐柳島アクセントをモーラ数が増すごとにアクセント型の

5) なお佐柳島の南隣にある高見島たかみしまのアクセントも金田一・秋永・金井のデータによる限り、佐柳島と全く同じ体系のものと考えられる。

表7 筆者の解釈による佐柳・真鍋両アクセントの対応

佐柳島			真鍋島	
		/	子	一〇
\〇	葉	/	葉	\〇
/〇	手, 子	/	手	/〇
一〇	〇	/	同左	犬
\〇	〇	/	〃	音
/〇	〇	/	〃	風
L〇	〇	/	〃	糸
一〇	〇 〇	/	〃	頭
\〇	〇 〇	/	〃	二十歳
/〇	〇 〇	/	〃	魚
L〇	〇 〇	/	〃	雀
一〇	〇 〇 〇	/	〃	頭が
\〇	〇 〇 〇	/	〃	二十歳が
/〇	〇 〇 〇	/	〃	魚が
L〇	〇 〇 〇	/	〃	雀が

数が殖えて行くピッチ・アクセント言語と推測した。上野氏は佐柳・真鍋の両アクセントを4型アクセントと推定はしたが、4モーラ以上の語の状態が判明するまでは、慎重に、アクセントの位置の有意味な言語と考えたのかもしれない。筆者としては、4音節以上の語の状態が判明して反証が出ない限り「慎重に」語声調言語と見るべきだ、と考えるのである。

3. 以上概観したように、これらの方言は、鹿児島方言や隠岐の五箇^{こか}村の方言(早田:332以下)のような「語声調言語」であって、語中のどこにアクセント(一)があるか、ということには音韻論的な意味がない

と考えられる。

単語あるいは文節全体のピッチ型が問題になる方言を東京方言などのように扱い、どのモーラ(或いは音節)にアクセントがあるかを定めようとするのは正しくないし、また無駄な努力である。語声調とピッチ・アクセントの両方を持つ京都方言などの、語声調だけでアクセント(フ)のない型、例えば低い語声調の単語「烏」(カラス)の、どのモーラ(或いは音節)が「低」か「高」か「昇」かを音韻論的に決めようとするのはつまらない努力であろう。或いは、音節声調言語である中国語北京方言の第3声が、その音節内のどこからピッチが上昇するのか、2分の1音節の所からか、3分の2音節の所からか——そのようなことを定めることに言語学的な意味があるであろうか。

語声調方言でも長崎方言のようにピッチの形がかなり固定しがちな方言では、音声表示レベル(或いは音素表示レベル)で高ピッチの位置を指定することに意味があろう。しかし、佐柳・真鍋両方言のようなピッチ形を呈する方言では、服部・上野両氏によって示されたような表示が、音韻(基底)表示より具体的で現実のピッチ曲線より抽象的な、言語学的に有意味な表示であるのかどうか問題であると思われる。例えば、佐柳島の単独形「命」[イ^フチ]、「鰯」[イ^ワシ]は、(後に続く形、[イ^フチガ…][イ^ワシガ…]から)筆者の音韻(基底)表示レベルでは、それぞれ /^フイノチ/ /^ワイワシ/ であるが、両氏の抽象的表示(アクセント素レベルの表示)では、それぞれ /イノチ/ /イワシ/ になっている。音韻(基底)表示レベルではアクセントの位置は関係ないし、それより具体的な表示レベルでは、両単独形は区別なく同じ形形でなければなるまい⁶⁾。このことは「肩」[カタ〜カタ]と

6) [イ^ワシ] という報告はない。かりに [イ^ワシ] の発音があっても、[イ^ワシ] の発音があるならば、[イ^ワシ] と [イ^フチ] は同じ音声形である。区別ある音韻(基底)形 /^フ○○○/ と /^ワ○○○/ が同一の音声形 [○○○] に実現して何らさしつかえない。

「庭」[ニウ~ニワ]|(それぞれ /カタ/ /ノニワ/) についても同じである。音の強さ(ストレス)の違いも、語声調の違いから予測がつく。

このような方言にアクセントの位置を定めようと努めることは「あまり本質的でない、時には決められもしないし、決める必要もない点にこだわって」(上野:291) いるのである。声調で弁別される体系では、アクセントの位置の「決着をつける必要はない。」

参 照 文 献

- 秋永一枝, 1966. 「佐柳アクセントの提起するもの」(『国文学研究』(早稲田大) 第3集) pp. 74~88.
- 上野善道, 1977. 「日本語のアクセント」(『岩波講座日本語5—音韻—』岩波書店) pp. 281~321.
- 金田一春彦・秋永一枝・金井英雄, 1966. 「真鍋式アクセントの考察」(『国語国文』第35巻, 第1号) pp. 1~30.
- 服部四郎, 1973. 「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは?」(『言語の科学』第4号) pp. 1~61.
- 早田輝洋, 1977. 「生成アクセント論」(『岩波講座日本語5—音韻—』岩波書店) pp. 323~360.
- HAYATA, Teruhiro, 1978. "The Accentual System of the Jinju Dialect of Korean", *Studies in Literature*, Kyushu Univ. Vol. 15.